
再会。

チェリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再会。

【Nコード】

N9469D

【作者名】

チエリ

【あらすじ】

ある日、突然恋人にフラれた愛美。

ショックを受けた彼女にさらに不幸が襲い、そして待っていた運命は……。

続編、完結しました！

長編恋愛小説『ブルースター』愛美と優二が再会した後のお話です。

- Prologue -

今日、私・千秋ちあきのなるとみ愛美は死んだ。

恋人にフラれたショックで。

・・・というと、大袈裟に聞こえるかもしれない。

だけど、端的に言えばそうだ。

つい数時間前の出来事。

あと一週間で25歳の誕生日・・・という日の今日、

会社帰りに話があると恋人の日高康成に呼び出された。

真面目な顔をして目の前に座る彼の顔を見つめ、

もしかして、もしかすると・・・なんて淡い期待を抱いた。

だけ・・・

彼の口から出てきた言葉は・・・

「俺と別れてくれ。」

・・・信じられなかった。

私は頭が真っ白になった。

フツーならここで「なんで？」と聞くんだろう。

けど、そんな事すら忘れるくらい何も考えられなかった。

いつ彼が目の前からいなくなったのかさえ・・・。

気が付けば私はどこに向かっているかもわからない状態で

ふらふらと歩いていた。

そして・・・

そのまま道路に出ていったところを車に跳ねられて即死・・・。

今・・・お父さん、お母さん、妹の綾音、弟の瑛悟が私を囲んで泣いている。

私の遺体を囲んで。

それを私は少し離れた所から傍観してる。

・・・私は魂だけになった。

そして・・・魂だけになった私は一緒に泣いた。

自分の遺体の前で自分の死を悲しんでくれる家族と一緒に泣くのは

なんかヘンな感じだけど・・・。

次の日、お通夜に康成さんが来た。

けど、全然悲しそうじゃない。

目も赤くなっていないから、ここに来る前泣いてたワケでもなさそうだ。

私の前でも涙を見せる事をしなかったから我慢してるのかな？

康成さんは私の遺影をじっと見つめた後、お焼香をした。

そして私の家族にもフツーに挨拶をして帰っていった。

でも……泣かないんだね？

昨日、別れたっていつても一応元恋人なんだし、

少しくらい泣いてくれたっていいのに……。

・・・このまま後を付いて行って見ようかな。

そうすれば彼が泣くところを初めて見られるかも。

私の小さな悪戯心に火が点いた。

私は彼と一緒に歩いていたらように彼の右側に並んでみた。

当然だけど、康成さんには私が見えていない。

車で来ていた康成さんは運転席に乗り込み、エンジンをかけた。

私はどうやって車に乗ろうかと考えた。

ドアに手をかけてみるけど掴めない。

・・・というより、すり抜けてしまう。

あ……すり抜けられるんだ？

私はドアをすり抜け、いつものように助手席に座った。

シートベルト……できないな。

……で、もう死んでるんだからしなくてもいいか。

相変わらず、なんにも“モノ”がない車内。

以前、私が小さなぬいぐるみを置こうとしたら、

「余計な物は置きたくないから。」って怒ったよね。

少しくらいは“私の分身”を置いてくれたっていいのになって思った
っけ。

私の実家からは彼のマンションまでそう遠くない。

少しの間のプチドライブ。

隣には見慣れている康成さんの横顔。

「ユー、真剣な顔をして運転してるトコすごく好きだった。」

「30分くらい走っただろうか・・・もうすぐ彼のマンションに着く。」

「この先の角を右に曲がって・・・」

「・・・て、あれ？」

「康成さん？」

「どうして左に曲がったの？」

「もしもし。」

「私は康成さんの目の前で掌を振ってみた。」

「けど、全然気付いてくれない。」

あー、そうか・・・見えてないんだった・・・。

まあ、そのうち道を間違えたコトに気付くよね。

私はプチドライブをもう少しだけ楽しむ事にした。

だけど、康成さんは自分のマンションへは向かわず、私の知らないマンションの駐車場へと入っていった。

え・・・？

なんでこのマンションに入ったの？

彼はそのまま車を降りて、エレベーターに向かった。

私も急いでその後を着いて行く。

康成さんは慣れた様子でエレベーターのボタンを押して、

少し壁に寄りかかった。

5階・・・？

5階に何があるの？

誰かの家に遊びに行くのかな？

喪服のまままで？

エレベーターを降りた彼はまるで自分の部屋に帰るみたいに歩き始めた。

どこ行くの？

・・・と、ある部屋の前で彼は足を止めた。

「ここ？」

誰の部屋？

彼がインターフォンを押して、「俺。」と言いつつ、

中から出てきたのは・・・

佐伯千鶴。

私の1年後輩の同じ会社で働く受付嬢。

「おかえり。」

彼女はにっこり笑って彼を出迎えた。

おかえり？

それって・・・どーゆーコト？

「ただいま。」

康成さんはそう言うと部屋の中へ入った。

ドアが閉められ、私はそのまま立ち尽くした。

あ・・・閉め出された。

・・・で、・・・すり抜けられるんだった。

私はドアをそーっとすり抜けて中に入った。

綺麗な部屋・・・。

私のアパートとは大違い。

お邪魔しまーす。

靴は・・・脱げないか・・・。

奥に行くとりビングで喪服の上着を脱いでネクタイを緩めている彼がいた。

ソファーに腰を下ろし、ふうーっと息をつく

「・・・しかし、まさか死ぬだなんて思わなかったな。」

と、煙草に火をつけた。

「・・・あ、煙草・・・やめて。」

彼女にそう言われ、康成さんはハッと何かに気がついたらしく、

「ああ・・・そっか・・・ごめん。」

と、すぐに煙草を灰皿に押し付けて消した。

佐伯さん、煙草の煙嫌いなのかな？

「悪阻・・・大丈夫か？」

悪阻・・・？

佐伯さん・・・妊娠してるの？

「うん・・・今は平気。」

佐伯さんは、そう言うと康成さんの隣に腰を掛けた。

「千秋さんにはなんて言ったの？私達の事。」

「何も・・・。」

「彼女・・・何も聞いてこなかったの？」

「ああ・・・俺が別れてくれて言ったなら、それっきり何も。」

「まさか・・・あなたと別れたのがショックで実は自殺とかじゃな

いわよね?」

「……どう……かな?」

そりゃ、ショックだったけど別に自殺じゃないよ?

佐伯さんは不安そうな顔で康成さんを見上げていた。

そしてその彼女の不安を消し去るかのように優しくキスをする。

ああ……そーゆーコトか。

やっとわかった……。

佐伯さんのお腹の子は康成さんの子で、彼女が妊娠したから

私は捨てられたんだ……。

康成さんは二股をかけてたってワケね。

どつりで車の中に“私の分身”も置かせてくれないはずだ。

そんな人が私の為に泣く訳がない。

私が死んだからといって、悲しむはずがない。

・・・もうこんなトコにはいたくないな。

私はバルコニーへと出た。

6月のやさしい風が吹いて、そのまま体を預けてみた。

体・・・と言えるのかどうかわからないけれど。

ふわりと風に乗って体が宙に浮いた。

このまま風に任せてたらどこに着くかな・・・？

しばらくの間、ふわふわと風に乗っていると
いつの間にか自分のアパートに帰っていた。

へんなの。

死んでからも律儀に帰って来るなんて。

あたしはドアをすり抜けて中に入った。

真っ暗な部屋。

昨日まで自分が住んでいた部屋なものものすごく
ひんやりとした空気を感じる。

成仏しちゃったら、もうこの部屋に帰ってくることもないんだな。。。

私はベッドに寝転び、目を閉じた。

さっき見た康成さんと佐伯さんのキスシーンがちらつく。

大好きだった康成さんに二股をかけられていた。。。。

そして、康成さんは私じゃなくて佐伯さんを選んだ。。。。

しかも、理由ができちゃったって。。。。

私。。。。死んでよかったのかも。。。。

目が覚めたら朝だった。

魂だけになっても“寝る”んだ・・・。

なんか不思議。

私は実家に戻ってみた。

お葬式をしている。

もちろん私の。

会社の上司や同僚、大学時代の友達や先輩、後輩も来てくれていた。

そして康成さんも・・・。

お葬式まで来てくれたんだ。

別に良かったのに……。

昨日のキスシーンを見てから康成さんへの想いは一気に冷めた。

あーあ……こんなコトなら別れてくれって言われた時に

一発くらい殴って水でもぶっかけてやればよかった。

なんだか沸々と怒りが込み上げてきた。

かと言って、魂だけになった今……なんにもできない。

ふと、家族がいる方に目を向けると一人の男性が

お父さんとお母さんに土下座をする形で深々と頭を下げていた。

・・・あの人誰だろう？

私はその男性に近づいた。

「・・・本当に申し訳ありませんでした。」

その男性は涙を流して何度も何度も謝っていた。

何故こんなに謝っているの？

「どうか頭を上げてください。」

「あなたのせいじゃないんですから・・・。」

お父さんとお母さんは泣きながらその男性の手を取った。

「警察の方から、事情は伺いました。」

「娘の方の不注意なんですから・・・。」

両親の会話から、この人が私を車で跳ねた人なんだと直感した。

そうだよ・・・。

私がふらふらと道路に出ちゃったから・・・。

それからその男性は、康成さんと同じ様に私の遺影をじっと見つめた後、

お焼香をして、最後に両親と綾音、瑛悟に深々とおじきをして実家を後にした。

私はその男性の事が気になって、後をつけた。

見えるはずもないし、絶対に気付かれるはずもないのに

2、3歩下がったところを歩く。

駅から電車に乗って、私のアパートの最寄り駅の隣駅で彼は降り、

駅から程近いんだか高級そうなマンションの一室へと入っていった。

いつも電車から見えてたマンション・・・

ここに住んでるんだ・・・。

私は男性の後を追って、ドアをすり抜けて中に入った。

そして、中に入ってびっくり。

佐伯さんのマンションも広くて綺麗だと思ったけど、

ここはもっと広くて綺麗だった。

康成さんの部屋よりも広いかも・・・？

いや、広いな。

男性は寝室に向かうと疲れたようにベッドにすくとんと腰を下ろした。そして喪服の上着を脱ぐこともネクタイを緩めることもしないままサイドテーブルに置かれた写真立てに視線を移し、
「ナル……。」と呟いた。

え……。

“ナル”……？

彼は写真立てを手に取ると、今度は静かに涙を流しながらもう一度「ナル……。」と小さく呟いた。

“ナル”……

私も昔そう呼ばれていた。

……とある人に。

私はゆっくりと彼に近づいて、後ろから写真立てを覗き込んだ。

この写真は・・・!?

どこにでもある集合写真。

だけどその前列の中央に大学時代の私がいた。

私は大学の時、野球部のマネージャーをしていた。

彼が今、手にしている写真は私が大学2年の時の夏の合宿の時に撮ったもの。

この写真は私も持っている。

今は実家に置いてあるけれど・・・。

どうして、彼がこの写真を持っているの？

この写真に写っている中で“ナル”と呼ばれていたのは私だけ。

そして・・・その私の事を“ナル”と呼んでいたのは・・・

ただ一人。

私は、彼の顔をゆつくりと覗き込んだ。

・・・やっぱり。

広瀬先輩だ。

いつも私の事を“ナル”って呼んでくれていた人。

大学時代、私が密かに想いを寄せていた人。

先輩が卒業してから一度も会うことはなかったけれど

まさか、こんな形で再会するなんて・・・。

しかも、私を跳ねた人が先輩だなんて……。

「ナル……。」

先輩は写真の中の私を指で優しく撫でてくれた。

そして写真の中の私に「ごめんな……。」と声にならない声で謝っている。

何度も……何度も……。

先輩は泣いてくれるんだね。

それに……私が死んだのは自分のせいだと思ってる。

そんな事ないのに……。

先輩のせいじゃないよ。

先輩は優しいからね……。

私は先輩の隣に座ってそつと頬に触れてみた。

だけど触れられるはずもなく、何度触れようとしても

すりすりすると私の手は先輩の顔をすり抜ける。

ごめんね……先輩。

私……先輩の涙も拭ってあげられない……。

なんにもできない……。

しばらくして先輩は寢室を出て、リビングの方へと行った。

私は後を追う事せず、ベッドの上に寝転んだ。

何もできないから……。

先輩の温もりが感じられる気がして……そのまま目を閉じた。

明日こそは……成仏しちゃうかな……？

明日……目が覚めたら……

先輩……

最後に、また会えて嬉しかったよ……。

ホントはお互い笑って再会したかったけど……。

「・・・美。」

・・・ん・・・

「・・・愛美。」

・・・誰？

「愛美つてば！」

聞き覚えのある声の主は返事をしない私のおでこをパチンと叩いた。

「・・・っ!?!?」

驚いてハッと顔をあげた瞬間、見覚えのある景色と

見覚えのある顔が視界に入ってきた。

「愛美……？」

見覚えのある顔……会社の同僚・塚田智子が私の顔を覗き込んでいる。

智子……私が見えるの？

「愛美、大丈夫？」

智子は私の目の前で掌を左右に振っている。

完璧、私が見えてるリアクションだよね？

「……智子？」

私は智子を呼んでみた。

「ん？」

返事をしたって事は私の声が聞こえているの？

「私が・・・見えるの？」

「はあ？」

智子は素っ頓狂な声をあげた。

「愛美・・・ふざけてんの？」

「・・・。」

「もしかして今、寝てた？」

智子は少し呆れた顔をしている。

寝てた・・・？

「……愛美？」

「……私……今、どうしてた……？」

「どろろしてたって……私と話してたかと思ったたら急に反応しなくなってる、」

俯いてずっと下を向いてたよ。」

「……どねくらいらい？」

「んー……10分弱くらいらい？」

「じゃ……あれは、夢……？」

「白飯夢……？」

「私……死んでないよね？」

「へ？」

「智子……私のお葬式行った？」

「……な、愛美……？」

私は自分の掌と足をじっと見つめた。

体が……ちゃんとある……。

「愛美……疲れてるんじゃない？」

……疲れてる？

「ここんところずっと遅くまで残業続いてたでしょ？」

確かにずっと残業続きだった。

・・・夢だったのかな？

「今日は早く帰ったほうがいいよ？」

智子はそう言くと私の顔を心配そうに覗き込んだ。

「うん、うん……。」

時計を見ると、昼休憩が終わる5分前だった。

私と智子はいつも会社の屋上でお弁当を食べている。

だけど今日は・・・お弁当を食べた後あたりから記憶がない。

やっぱり・・・あれは夢だった・・・？

部署に戻って、自分の席に座ると携帯が鳴った。

康成さんからのメールだ。

-
-
-
-
-

話したいことがあるから今日、会社が終わったら

いつもの店で待ってて。

-
-
-
-
-

私はそのメールを見て少し震えた。

夢の中と一緒だ・・・。

夢の中で康成さんに呼び出された時と同じメールの内容。

そして・・・今日は6月7日。

私の誕生日の一週間前・・・。

夕方、定時を1時間ほど過ぎた頃。

康成さんはいつも少し残業をする。

だから会社帰りに待ち合わせする時は私も少しだけ残業をしている。

そして会社から少し離れた喫茶店で待ち合わせ。

私が喫茶店に入ると珍しく康成さんの方が先に来ていた。

「ごめん、待った？」

私がそう言つと彼は無言で首を横に振つた。

彼の目の前に座り、口から出る言葉を予想しながら待った。

康成さんはあの夢の中と同じ顔をしている。

そして・・・

「俺と別れてくれ。」

・・・やっぱり。

予想通りの言葉に私は驚きもしなかった。

夢の中とは言え、一度聞いてるしね。

・・・けど、ここからの私は夢の中とは違う。

「子供でも出来た？」

少し冗談っぽく笑いながら言った私に、康成さんは驚きを隠せない

でいた。

「相手は・・・佐伯さん・・・でしょ？」

追い討ちをかけるようにちよつと真顔で言ってみた。

「・・・知ってたのか・・・？」

康成さんは少し震えた声で呟いた。

あっさりと認めた彼に私は夢の中で思ったことを実行した。

パンツ・・・！

乾いた音が響いた。

そしてその後すぐに

パシヤッ！

水の音。

私は彼の左頬に思いっきり平手打ちをお見舞いして
水をぶっかけてやった。

「さよなら。」

喫茶店の中のお客さんが注目する中、私は彼の前から姿を消した。

あんな男こっちから願い下げよ・・・！

喫茶店を出た後、私は真っ直ぐアパートに帰る気にもなれず、
ただ歩いていた。

だけど、夢の中のようにふらふらじゃない。
意識だってちゃんとある。

横断歩道の手前で信号待ちをしている一台の黒い車の横を

通り過ぎようとした時、運転席から一人の男性が降りてきた。

・・・ん？

「ナルツ！？」

その男性は私を見るなり、小さく叫ぶように言った。

「・・・っ！？」

私の事を“ナル”と呼ぶのは一人しかいない・・・。

嘘・・・。

広瀬先輩・・・？

目の前まで近づいてきた男性の顔を恐る恐る見上げた。

夢の中の広瀬先輩と同じ顔・・・。

「広瀬先輩・・・？」

「やっぱり・・・ナルだ。」

私が広瀬先輩と呼びかけると、先輩は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ホ、ホントに広瀬先輩・・・？」

「うん！俺だよ。」

その言葉に私も思わず笑みがこぼれた。

先輩とは夢の中でしか会えないと思っていたのに。

会えた・・・

先輩と会えた・・・！

「・・・先輩っ！」

思わず私は広瀬先輩に抱きついた。

「・・・えっ・・・ちょ・・・ナルツ!？」

先輩はちよっと戸惑っている。

だけど・・・そんな事はお構いなし。

だって・・・だって笑って再会できたんだから・・・。

・ 3 ・ (後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。
続編も予定していますので、また続編でお会いできればと思っています。
ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9469d/>

再会。

2010年12月19日11時49分発行